

## 滑稽俳句はピン芸人(一)

伊藤浩睦

作家として最近では執筆活動だけではなく、講演の仕事も入っていますが、何十人かの初対面の人たちから、こちらは一人で、つかみネタで、笑いを取ることの難しさを感じるがあります。

自分が主宰している俳句会でも話はしますが、こちらはよく知っている人なので、仲間ネタで最初に笑いを取っておくことは容易です。

頭で笑いを取っておくと、空気が解れてあとが話し易いのですが、なにもないところから、一人で笑いを取るのには難しいのです。二人のコンビであれば、相方の禿げ頭を叩いておけば取り敢えず笑いはとれるのですが、一人ではそういうこともできません。

一人でやるピン芸人という人たちがいます。一人芸でも物語がある落語とは違います。何も無いところから一回で笑いを取るような芸で、「そんなの関係ない」とか、「ワイルドだろー」とかいった言葉で瞬間的に一世を風靡しますが、あっという間にどこかに行ってしまう。

落語や漫才の人が長期的に活動をしているのに比べると、消えるのが早い訳ですが、一人でなにもないところから笑いを取るのには難しく、一言で笑いをとることが出来るような言葉が、続いてその人から出て来ることが稀なので、一回限りの人気で消えて行く傾向になるのでしょう。

後も先も無しの十七文字だけで笑いを取ろうとする滑稽俳句は、私にはピン芸人の難しさがあるように感じられます。

それに対して、連句は落語であり、前句付けは漫才です。物語のある連句や、掛け合いになる前句付けは笑いが取り易いのです。

故桂枝雀師匠は高座でも、笑いは緊張の緩和であるとよくおっしゃられましたが、滑稽俳句は十七文字の中で、緊張を作り出して、緩和まで行かなくては

なりません。これは、ピン芸人や、知らない多数の相手からつかみネタで笑いを取ることの難しさに通じるものでしょう。

私が主宰している俳句会では、いつも俳句の競い合いだけでは飽きが来るので、盆暮れに、前句付けの会や連句の会を試しにやっているのですが、そこで笑いが取れる滑稽な句を作るのは割りと容易ですし、俳句では笑いが取れるような句など作れない人でも、連句や前句付けだと笑いが取れる句が、本人が意識しなくても出来てしまうことがよくあるのです。

どういうことかということ、連句や前句付けでは、前の句が自然と緊張感を作り出してくれていて、聞き手はこの緊張感を、次の句や、付ける句で、どのようなかたちで緩和してくれるかに期待しているのですから、一句で緊張と緩和を行なう必要はなく、期待を外さないように緩和を行なえば笑いが成立します。

これは自分が懸命になって滑稽句を作っているだけではなかなか気がつくことではないのですが、教えて出た句をまとめる側に立ってみると、笑える句を作り出す原理として、それなりにその姿が見えてくるものだといえます。

(続く)